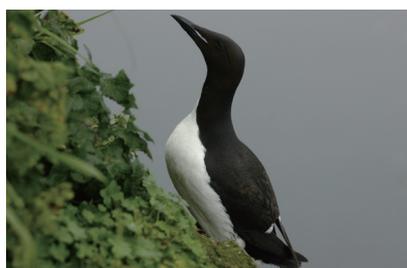


今年は酉年です。それにちなんで北極にはどんな鳥がいるのか興味を持ちました。
スバルバル諸島やベーリング海の島で撮影された鳥たちをご紹介します。



キョクアジサシ



ハシブトウミガラス



カオジロガンの親子



ツノメドリ



雪化粧したライチョウ



ユキホオジロ

目次

北極科学技術大臣会合参加報告	2
アジアと北極海航路参加報告	3
日露若手北極研究者交流会参加報告	4
Finnish-Japanese Early Career Arctic Scientists (ECAS) workshop 参加報告	5
第5回国際北極研究シンポジウム (ISAR-5) 開催準備状況	7
今後の主な会合	8
開催案内・編集後記	9

表紙写真 (左列: 内田雅己、右列: 高橋晃周 / ともに国立極地研究所)



米国ホワイトハウス主催 Arctic Science Ministerial: ASM 北極科学技術大臣会合参加報告

榎本 浩之（えのもと ひろゆき）
国立極地研究所 教授



2016年9月28日に、米国ワシントンDCのホワイトハウスにおいて北極科学技術大臣会合（Arctic Science Ministerial : ASM）が開かれた。北極評議会メンバー8カ国の大臣級の代表および先住民団体代表、日本を含めたその他の14カ国の各国からの大臣級の代表、EU代表が参加した。同会合では北極に関する科学を取り巻く課題とその地域的・全球的影響、北極観測と観測データの共有、北極の科学的理解の促進等について議論が行われた。

日本からは松本洋平内閣府副大臣（海洋政策）が代表として参加し、長年にわたる日本の北極観測・研究の成果や、2015年に開始した「北極域研究推進プロジェクト（ArCS）」について紹介した。北極域の問題について各国が観測を強化し、得られた知見を共有し、一致団結して北極問題へ対応すべき旨を主張された。各国の政策決定者からの代表とともに、研究者からの参加も許され、各国代表の発表や議論を支援する役割を担った。

会議では北極に関する科学技術協力強化の重要性等を訴える共同声明がまとめられた。なお、この資料は内閣府のHPにて公開されている。http://www.cao.go.jp/minister/1608_y_matsumoto/photo/2016-011.html

共同声明では、北極科学活動に関して取り組むべき4つのテーマが掲げられており、それらは以下の4つとなっている。

1. 北極科学を取り巻く課題とその地域的・全球的影響
2. 北極観測と観測データ共有の強化
3. 北極地域の強靱性と世界的な取り組みのための北極の科学的理解の促進
4. 北極科学を活かしたSTEM教育（理数科教育）による市民のエンパワーメント

各テーマの詳細は、内閣府で公開されている全文（英文及び日本語訳）をご覧ください。

概要としては、北極を取り巻く課題はその地域に閉じたものではなく、国際的に取り組むべきものであること。観測とデータ共有では、SAON (Sustainable Observing Network) の重要性が取り上げられている。SAONの方針の重要性は認識されているが、どう力をつけていけるかが課題になっている。北極地域の強靱性については先住民社会や民間の活動についても取り上げられている。特に会議

では、先住民と協働する観測体制を作るべきであるという意見がしばしば出た。米国で開かれた背景もあるかもしれないが、今後の北極研究には先住民への貢献や先住民の参加を取り込むものが尊重されるものと思われる。最後の教育に関しては、理科教育とはいうものの社会的な課題全体の教育やアウトリーチの重要性があげられ、それが参加する個人や団体、社会の強さにつながるといった内容である。

この会合の準備のために、事前に各国の参加予定者・関係者で電話会議が複数回開かれた。私もその電話会議から出席したが、各国が取り組んでいる研究活動とともに、その継続性をどう作っていくかがしばしば話の焦点になった。研究の重要性や取り組んでいる体制は、各国の研究者が紹介している。電話の向こうには、聞き覚えのある声や知っている研究者などの名前、プロジェクトの名称が出てきて、電話だけでなく、時にはメールによるチャットも飛び交いながら、情報交換が進められた。研究活動に関する話題では研究者からの情報提供が有効だったが、継続した体制作りのための予算をどう維持するかという話題では、行政関係者を中心とする検討になっていく。

研究情報の交換、大臣級の意思表示、そしてどうやって今後活動して行くか、会議はまだ続いていく。次回の大臣級会合は2018年にEUが開催準備をすることになっているが、政府の実務者や研究者を中心とした会合はASSWの機会も使われる可能性もある。



会合の場となった Indian Treaty Room のあるアイゼンハワー行政府ビル



国際セミナー

アジアと北極海航路参加報告

大塚 夏彦（おつか なつひこ）
北海道大学 教授



公開セミナー

2016年10月26日、北海道大学において、国際セミナー『アジアと北極海航路、～変貌する北極域とアジア、欧州とアジア研究者による学際的研究の動向～』が開催された。主催はリーズ大学東アジア政治経済研究所、北海道大学北極域研究センター、及び北海道大学 GI-CoRE 北極域研究グローバルステーションである。また、北海道大学サステナビリティ・ウィークのもとで開催されたものである。このセミナーは、英国リーズ大学クリストファー・デント教授を代表とする英国・フィンランド・スウェーデン・ノルウェー・インド・日本・韓国・中国の研究者からなる研究チームによる、国際政治・安全保障・経済・海事・地政学・環境などの学際的分野のネットワークのもとで進められている、‘Asia and the Northern Sea Route’ programme (<http://asiachangingarctic.com/asia-nsr>) の成果を紹介することを主旨としている。この研究プログラムの目的を以下に示す。

- アジアにおける、北極海航路の価値・戦略・対応等に関する知識と理解を深める。
- 北極海航路による環境影響と北極の持続的利用に関する知識と理解を深める。
- 北極海航路に関連する分野横断的な研究ネットワークの構築とアジアの動向の分析。
- 北極海航路に関し、政策決定者への適切な情報と知見の提供。
- 学際的研究成果の社会実装。

本セミナーは、北極海航路に関連するアジア地域の政策ならびにその背景等に関する研究成果を紹介し、研究の社会的実装を諮ると同時に、参加者からの反応を今後の研究にフィードバックすることを企図している。10月26日午前は専門家ワークショップとして英語で開催し、午後は公開セミナーとして、より一般の参加者を対象に研究成果の紹介を主体とし、日本語の逐次通訳を提供して開催された。

専門家ワークショップ

午前に開催された専門家ワークショップには約30名が参加し、次の4件の発表とそれぞれの発表に関する質疑が行われた。

- Aki Tonami (筑波大学)：日本・中国におけるインフラ投資の比較研究

- Cong Xiaonan (Chinese Academy of Social Sciences, China)：CGE分析による北東航路の世界経済への影響の研究
- Outi Luova (Turku University, Finland)：日本海における北極海航路のハブ、新たな動機と既往の計画
- Jae-Seung Lee (Korea University, Korea)：北極海航路に関するリスクマネジメントと新たな挑戦

公開セミナー

午後に開催された公開セミナーには、企業、自治体、大学、研究機関などから約40名が参加し、次の4件の発表と、それに関する質疑が行われた。

- Christopher Dent (University of Leeds, Britain)：アジアと北極海航路～壮大な辺境のインフラ展望
- Liisa Kauppila (Turku University, Finland)：北極に関する北東アジア地域間協力における中国の多様なアクター
- Natsuhiko Otsuka (北海道大学)：近年の動向から見た北極海航路の展望
- Jae-Seung Lee：北極海航路に関するリスクマネジメントと新たな挑戦

セミナーの概要

北極海航路の利用においては、環境的、経済的、地政学的、気候的、社会的、ならびに国家政策的な要因に強く由来しながら、いかに持続的に実現するかが重要な課題となっている。また、学際的・多面的視点から考えることが必要となっている。本セミナーでは、北極海航路に関わるインフラ投資、経済インパクト、海運分野の政策動向、リスクマネジメント、航路利用の展望などに関する研究講演が行われた。研究の視点は、欧州社会から見た日・中・韓における北極海航路に関する政策や活動などの分析を中心に、北極海航路のポテンシャル、経済性、課題、および海上輸送ルートとしての評価に言及するものであった。

若手交流



小谷 亜由美
(こたに あゆみ)
名古屋大学 助教



鄭 峻介
(てい しゅんすけ)
北海道大学 博士研究員

International Russian-Japanese
conference of young polar scientists

日露若手北極研究者交流会
参加報告

« Prospects of joint investigations in polar
regions of the planet »

日本とロシアの北極環境研究にかかわる若手研究者の学術交流を進めることを目的に、2016年10月11～13日ロシア科学アカデミーモスクワ本部にて、日露若手北極研究者交流会が実施された。本会は、両国の若手研究者の関係を深化させ、若手研究者のネットワークを構築するとともに、同分野における将来の協力可能性の端緒を得ることをねらいとしている。日本側から北極環境研究コンソーシアム(JCAR)をはじめとして、北海道大学北極域研究センター、北極域研究共同推進拠点(J-ARC Net)、APECS (Association of Polar Early Career Scientists) 日本支局、日露青年交流センター、ロシア側よりInstitute of Physico-chemical and Biological Problems in Soil Science RAS、Council of Young Scientists RAS、Permafrost Young Researchers Network RUSSIA、Autonomous Nonprofit Organization of Young Polar Researchers “Polar Initiative” の主催・後援により企画開催されたものであり、日本からは15名(うち6名が大

学院生)が参加した。

交流会初日は、主催団体からの挨拶で開会した。プレナリーセッションでは、日露の中堅研究者4名が最新の北極研究成果や国際協力等について会議全体を俯瞰する内容の基調講演を行った。J.Stanilovskaya氏(Institute of Geocology、RAS)は、シベリア・アラスカ・北海道での凍土調査における日露研究協力、社会への研究成果発信、凍土研究の若手研究者の活動について紹介した。V.Semenov氏(Institute of Atmospheric Physics、RAS)は、北極域の気候変動および温暖化増幅メカニズムについて解説した。永井信氏(海洋研究開発機構)は、衛星観測に基づく地球規模の植物季節変化研究とアラスカやシベリアにおける現地観測研究を紹介し、国際協力の重要性を述べた。G.Kraev氏(Center for Ecology and Productivity of Forests、RAS)は、シベリアのツンドラ地域の二酸化炭素排出源と人為影響の評価を解説し、日本での類似プロジェクトとの協力可能性を提起した。

続いて研究ワークショップを一日半にわたって実施し、参加者が以下のプログラムで多岐にわたる分野の研究発表を行った。第一部「北極域の海洋・陸域生態系 Polar marine and terrestrial ecosystems」(露5件、日7件)では、ロシア各地からアラスカのツンドラ・森林・水域生態系までを対象とした、凍土過程や水循環、物質循環に関する発表が行われた。第二部「気候変動下の永久凍土と氷河過程 Permafrost and glaciation under the modern climate change」(露4件、日5件)では、シベリアやグリーンランドの大気循環、氷河、海洋、永久凍土生態系の微生物や物質循環、凍土モニタリングなど北極地域での環境変動に関する研究が紹介された。第三部「極域生態系への人為影響 Anthropogenic impact on polar ecosystem」(露1件、日2件)は予定よりも規模縮小となってしまったが、ロシア北極地域



参加者たち

でのエネルギー経済問題、漁業活動と集落社会、気候快適度の評価についての発表があった。

2日間を通して日露の若手研究者がロシアだけでなく日本やアラスカ、グリーンランドなどを対象とする研究紹介やこれまでの日露協力の経験を話し、質疑応答を通して互いに意見・情報交換をすることができた。さらに日本からの大学院生参加者はポスター発表もを行い、通常の学会と比べて時間をかけて、一人ひとりが参加者全員に対して各自の学位研究について紹介した。学生参加者はロシア人研究者からアドバイスを受けたり、日露の学生間で議論を行ったりすることができた。今回の参加者の多くは永久凍土を研究対象としており、北極地域の生態系における二酸化炭素やメタンを中心とする炭素循環、凍土プロセス、これらの自然現象と気候変動や人間社会とのかわりといった北極環境における喫緊の研究課題に関する問題意識を共有しており、互いの調査地や研究手法、得られた結論についての議論があった。

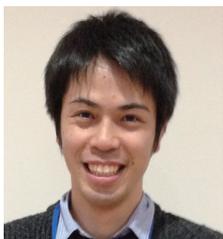
交流会の2日目午後には、日露研究交流の将来についての総合討議（Ways of strengthening of Russian-Japanese collaboration in the Arctic）が行われた。日露の両国の参加者から、各自の経験や国際共同研究のための体制等を紹介し、今後の日露間での研究協力を進めるために、特に若手研究者の役割を高めていくために何をすべきか、意見を出し合った。現実的には研究資金と人材をいかに確保するか日露双方とも苦戦してお

り、時間をかけた取り組みが必要である。しかし、今回得られた人脈を利用してこのような集会を継続して行うこと、APECSやPYRN（Permafrost Young Research Network）など若手研究者ネットワークへの参加や、メーリングリスト等を通して情報交換を行うことから始めたいとした。日露双方の若手研究者・学生にとって英語で行う研究会への参加は今後のキャリアにおいても貴重な経験であり、その点からも今後の研究交流会の継続は重要であるとの意見もあった。

交流会の文化プログラムとして、初日のワークショップ終了後にロシア科学アカデミーのホールでのバンケットと、2日目夕刻にモスクワ川クルージング船上で懇親会を行った。懇親会では日露の参加者が専門の研究についてだけでなく、研究・学生生活や趣味や地域の話で盛り上がった。また、ロシア若手研究者がモスクワの歴史や文化、建築などについて若者視点での解説をし、通常の観光クルージングとは異なる体験ができた。3日目には、モスクワ市内クレムリン周辺を視察した。限られた時間ではあったが、観光ガイドやロシア若手研究者からロシアの歴史だけでなく最新の政治経済事情に関する話を聞き、逆に日本人参加者に対して自国の紹介を求められる場面もあり、お互いの理解を深める一端となった。

本交流会は、日露青年交流センターの短期派遣事業プログラムとして実施されると共に、北極域研究共同推進拠点からも旅費等の補助を受けている。

若手交流



漢那 直也（かなな なおや）
北海道大学 博士研究員

Finnish-Japanese Early Career Arctic Scientists (ECAS) workshop 参加報告

« Prospects of joint investigations in circum-Arctic region »

我が国における北極域研究推進のためには、日本が北極圏国と連携し、国際的・学際的な協力体制を築くことが必要である。諸外国は、Association of Polar Early Career Scientists（APECS、寒冷圏・極域を研究対象とする若手研究者で構成される国際的・学際的な組織）に代表されるように、各国の若手研究者間の情報交換や、国際会議でのワークショップの開催、アウトリーチ活動など、北極域の研究・教育に関わる情報発信を活発に行っている。しかしながら日本には、これまで若手研究者が主体となって、国際的な北極域研究コミュニティの構築に携わる機会はほとんどなかった。このような背景の中、2016年5月にAPECS日本支局の設立会合（幕張、JpGU会場）が行われ、日本の北極域若手研究者からなる組織が立ち上がった（代表：鄭峻介 / 北海道大学）。本報告は、APECS日本支局の設立後に初めて行われた、日本の若手北極域研究者による国際的・学際的な活動報告となる。

2016年10月17日～19日に、フィンランド・ヘルシンキにおいて、主に北極圏で研究活動を行っている若手研究者のワークショップが開

催された。本ワークショップは、日本とフィンランド間の若手研究者の学術交流を図ることにより、若手研究者間のネットワーク構築・将来の協力可能性の端緒を得ることを目的としている。17日は主に自然科学分野間の学術交流が行われ、日本の若手研究者4名（北海道大学、東北大学）、フィンランドの若手研究者7名（ヘルシンキ大学、フィンランド気象研究所）が、自身の研究プロジェクトについて発表を行った。提供された話題は、シベリア永久凍土地域の森林・水域生態系及び、人文社会に関する研究、グリーンランド氷床・氷河と周辺海域及び、ヒマラヤ山岳氷河に関する研究、北極海の海氷域面積変動・予測に関する研究と多岐に渡り、研究分野の異なる若手研究者が意見を交換し合い、活発な議論を行なった。発表の中で革新的な現地観測手法や、衛星画像解析と最新の数値モデルを組み合わせた数値シミュレーション結果等が紹介され、参加者が相互に刺激を受けた学際的なワークショップとなった。

本ワークショップの後半には、シニア研究者4名（北海道大学、スバルバル大学 / ベルゲン大学、ヘルシンキ大学、フィンランド気象研究所）をメンターとして招き、若手研究者のキャリアパス形成に関する講演とパネルディスカッションが行われた。講演とパネルディスカッションにおいて共通したキーワードは、「国際的・学際的な研究協力の重要性」であり、若手研究者自らがキャリアを開拓する上で、研究者間のネットワーク構築が必要不可欠であることを再確認した。

18日は人文社会学、国際政治学分野の若手研究者との学術交流が行われ、日本の若手研究者、シニア研究者からの発表に加え、フィンランドの若手研究者3名（ヘルシンキ大学）が、自身の研究プロジェクトについて発表を行なった。気候変動に伴う北極圏の

利用可能性（特に北極海航路について）や、シベリア陸域生態系への人為的影響評価、極域環境変動下での生物資源の変化が地域住民の生活へ及ぼす影響評価などについて話題提供があった。前日に開催された自然科学分野間の学術交流とは異なる視点から議論がなされ、自然科学的根拠に基づく気候変動の評価をベースに、北極圏の地域社会の諸問題（環境保護、持続可能な開発など）についてどのような解決策を打ち出していくべきか、といった人間社会に踏み込んだ議論が活発に行われた。また同時に、多角的な視点から北極圏の諸問題に取り組む必要があることを相互に再認識し、北極域研究を推し進めるための分野連携の必要性・重要性について議論を重ねた。ワークショップ最終日の19日には、フィンランド気象研究所エーロ・リンネ博士のご厚意により、バルト海の海氷研究で活躍している砕氷研究船「Aranda」の船内を視察することができた。本活動が、両国間の国際的な研究協力の端緒となることを期待している。

本活動を通して、日本とフィンランド間の若手研究者のネットワークが構築され、また将来の協力可能性が見出された。非北極圏国である日本が北極域研究を推し進めていくためには、北極圏国との国際的・学際的な研究協力が今後ますます重要になり、次世代の北極域研究を担う若手研究者が、国際的な北極域研究コミュニティの構築に積極的に関わっていく必要がある。本ワークショップが、その取り組みの第一歩となることを期待している。

本ワークショップは北極域研究共同推進拠点（J-ARC Net）、Association of Polar Early Career Scientists（APECS）の支援を受けて実施された。紙面をお借りして深く感謝申し上げます。



ワークショップの全体写真



JCAR から

第 5 回国際北極研究シンポジウム (ISAR-5) 開催準備概要

はじめに

2008 年から北極研究にかかわる有志を中心に運営されてきた国際北極研究シンポジウ

ム (ISAR) は、第 4 回 ISAR の際にかかれた国際北極科学委員会 (2015 年 4 月 29 日富山) において、第 5 回の開催が推奨された。それを受けて、JCAR の運営委員会が協議し、第 5 回国際北極研究シンポジウム (ISAR-5) の組織委員会 (SOC) を発足させた。SOC は ISAR-5 の企画・運営に責任を持つ組織で、SOC の第 1 回会で委員長に青木輝夫氏を選出して、活動を開始している。

開催の目的

北極における急激な温暖化が少しずつ明らかになり、それに対する対応・対策も考えられるようになってきたが、北域の持続可能な社会・経済・資源開発のためには、気候・環境変化の将来予測の精度はいまだに不十分である。ISAR-5 は世界各国の様々な分野の北極域研究者が一堂に会し、科学的研究成果について議論し、解決すべく課題を抽出して共有し、将来の北極の姿を探ること

当日までの予定 ※最新情報は ISAR-5 ホームページでご確認ください。 <http://www.jcar.org/isar-5/>

期日	内容
2017 年 1 月 18 日	WEB 公開、First Circular 配布、Call for session starts
4 月 15 日	Call for session ends, coordination of proposed sessions starts
6 月 9 日	Session is fixed
6 月 12 日	第 3 回 SOC (Second Circular の承認)
6 月 15 日	Second Circular 配布、WEB 登録サイト公開、Call for Abstract and Registration starts
8 月 31 日	Call for Abstract ends
9 月 15 日 ~ 9 月 30 日	Notice of Accept/Reject
10 月 1 日	初回セッションプログラム提出
10 月 20 日	セッション内最終 program 提出締め切り
10 月 30 日	第 4 回 SOC (Third Circular の承認)
10 月 31 日	Notice of Oral/Poster
11 月 1 日	Third Circular 配布、Program opens
11 月 15 日	Early Bird Registration ends
12 月 15 日	Registration ends
2018 年 1 月 15 日	受付、サイドミーティング、公開講演会
16 日	シンポジウム開会式
17 日	シンポジウム
18 日	シンポジウム閉会式
1 月 30 日	第 5 回 SOC (反省会)
1 月 31 日	Intent of Submission for Special Issue on <i>Polar Science</i>
6 月 30 日	Deadline of Paper Submission for Special Issue on <i>Polar Science</i>



を目的としている。

開催日と場所、見込み参加者数

開催日は2018年1月15日(月)から18日(木)、場所は一橋大学一橋講堂(東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 学術総合センター内)を予定している。期間中には日本の一般市民への公開講演会も予定している。13日(土)から14日(日)はセンター入試のため大学関係の参加者を考慮して、1月15日は当日受付と公開講演会を実施し、16日(火)から18日(木)をシンポジウムとしている。

過去のISARについては<http://www.jcar.org/isar/>でご覧頂ける。前回のISAR-4は、ASSW2015の科学シンポジウムとして開催されたので参考にならないが、ISAR-3が約270人の参加を集めたので、同じくらいの開催規模と考え、ISAR-5の参加者数は300人を想定している。

運営体制

「はじめに」に書いたようにSOCが運営のための最高議決機関であり、18名の委員からなる。この他にSOCの求めに応じて国際的な立場からアドバイスする国際科学諮問委員

会(IAC)を設けた。これまでISARの活動に貢献のあった方や国際会合などで中心的な活動をしている方など18名の内外の研究者からなっている。

ISAR-5は全体セッションと一般セッション、特別セッションから構成される。全体セッションは国際的に著名な方や各セッションの鍵となる発表によるセッションで皆が集まって行う。一般セッションは既存の科学分野(大気、海洋・海氷、雪氷、水文・凍土、陸域生態、海洋生態、人文科学、社会科学)からなり、特別セッションは分野横断的なセッションを募集して決定する。

今後の主な会合

時期	会合名	参考 URL
2017年		
1月22日(日)～27日(金)	Arctic Frontiers Conference 2017 (Tromso, Norway)	http://10times.com/arctic
2月12日(日)～71日(金)	IACS 2017 Scientific Assembly Joint IGS-IACS-CLIC International Symposium on the Cryosphere in a Changing Climate (Wellington, New Zealand)	http://www.climate-cryosphere.org/meetings/upcoming-clic/2017-cryosphere-in-a-changing-climate-conference
2月19日(日)～22日(水)	第32回北方圏国際シンポジウム「オホーツク海と流氷」(紋別)	http://www.o-tower.co.jp/okhsympo/top-index.html
3月18日(土)	ArCS 公開講演会「北極研究と日本—我々はなぜ北極を研究するのか—」(東京)	http://www.arcs-pro.jp/
3月20日(月)～21日(火)	第2回日露北極共同研究ワークショップ2017(Moscow, Russia)	
3月27日(金)～30日(木)	Polar Prediction Workshop 2017 (Bremerhaven, Germany)	http://tinyurl.com/Polar-prediction-workshop-2017
3月31日(金)～4月7日(金)	ASSW2017 (Prague, Czech Republic)	http://www.assw2017.eu/
4月24日(月)～27日(木)	AMAP INT'L CONF. ON ARCTIC SCIENCE (Reston, USA)	http://www.amap.no/events/conference/amap-international-conference-on-arctic-science-bringing-knowledge-to-action
4月23日(日)～28日(金)	European Geosciences Union General Assembly 2017(Vienna, Austria)	http://egu2017.eu/home.html
5月20日(土)～25日(木)	日本地球惑星科学連合 JpGU-AGU Joint Meeting 2017 (千葉)	http://www.jpгу.org/meeting_2017/
6月8日(木)～17日(土)	International Congress on Arctic Social Science Conference (Umea, Sweden)	http://iassa.org/icass-ix
6月11日(日)～15日(木)	24th International Conference on Port and Ocean Engineering under Arctic Conditions, POAC 2017 (釜山)	http://poac17.kmou.ac.kr/
6月25日(日)～30日(金)	The 27th International Ocean and Polar Engineering Conference, ISOPE-2017 (San Francisco)	http://www.iso-pe.org/
6月25日(日)～30日(金)	36th International Conference on Ocean, Offshore and Arctic Engineering, OMAE2017 (Trondheim, Norway)	https://www.sintef.no/en/marintek/initiatives/omae/
7月2日(日)～6日(木)	2nd Asian Conference of Permafrost :ACOP2017(札幌)	
2018年		
1月15日(月)～18日(水)	ISAR-5 (一橋講堂、東京)	
3月14日(水)～19日(月)	IGS-Kyoto-2018 (京都)	https://www.igsoc.org/symposia/2018/kyoto/
6月15日(金)～6月27日(水)	POLAR2018:SCAR/IASC (Davos, Switzerland)	http://www.iasc.info/

開催案内：第2回アジア永久凍土会議



The 2nd Asian Conference on Permafrost 2017 (ACOP2017：第2回アジア永久凍土会議 2017) を今年の7月2日～6日に北海道大学（札幌）を会場として開催します。この学会は International Permafrost Association（IPA：国際永久凍土協会）が4年に一度開催している国際会議の地域版（Regional Conference）として国際会議の間の年に開催するもので、日本でIPAの永久凍土会議を開催する初めての機会となります。アジア・シベリアの永久凍土に関する研究を中心に、凍土や土壌凍結に関わる自然科学・地理学・工学・人文社会科学などの分野の最新の研究を発表する学際的な国際会議です。日頃から凍土研究に関わっている方に限らず、興味を持たれた方にも是非この機会に学会にご参加いただき、国内の関連研究の活性化につながって欲しいと考えております。

詳細は学会 web サイト (<http://acop2017.arc.hokudai.ac.jp>) をご参照頂ければと思いますが、発表のための予稿登録メ切りが1月末に迫っていますので、凍土、あるいは土壌凍結というキーワードに関連したテーマをお持ちの方には是非発表をご検討頂ければと思います。

編集後記

執筆者および事務局の皆様のおかげで、ニュースレター第6号を発行することができました。どうも有難うございました。今回は昨年秋以降に行われた会議や若手研究者の海外派遣の記事を中心に編集しました。

新年にあたり、現在2年目のArCSプロジェクトは来年度の実施計画が検討されています。また、今年度開設された北極域研究共同推進拠点は2年目となる来年度の共同研究の公募を開始しています。GRENE北極事業をオールジャパン体制での北極研究の第1フェイズとすると、今年は第2フェイズが本格化する年となると思います。JCARについては運営のあり方が議論されている変革期にありますが、本ニュースレターがJCAR会員の皆様の様々な活動の一助となればと思っています。

我々のワーキンググループの活動は、会員の皆様のご協力・ご支援があって初めて成り立つものですので、掲載する記事や写真のご希望がありましたら、是非ご連絡ください。また、忌憚なきご意見、ご批判についてもお寄せ頂けると幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

JCAR 第3期情報・コミュニケーションWG代表 深町 康（北海道大学）

お問い合わせ先

本ニュースレターについては事務局までお問い合わせください。

北極環境研究コンソーシアム事務局

〒190-8518

東京都立川市 緑町 10 - 3

TEL:042-512-0927

E-mail: jcar-office@nipr.ac.jp

FAX: 042-528-3195

Web サイト:

<http://www.jcar.org/>

北極環境研究コンソーシアム情報・コミュニケーションWG

代表

深町 康（北海道大学）

委員

伊勢 武史（京都大学）

金野 祥久（工学院大学）

佐藤 篤司

杉浦幸之助（富山大学）

田中 泰義（毎日新聞社）

照井 健志（国立極地研究所）

山口 一（東京大学）